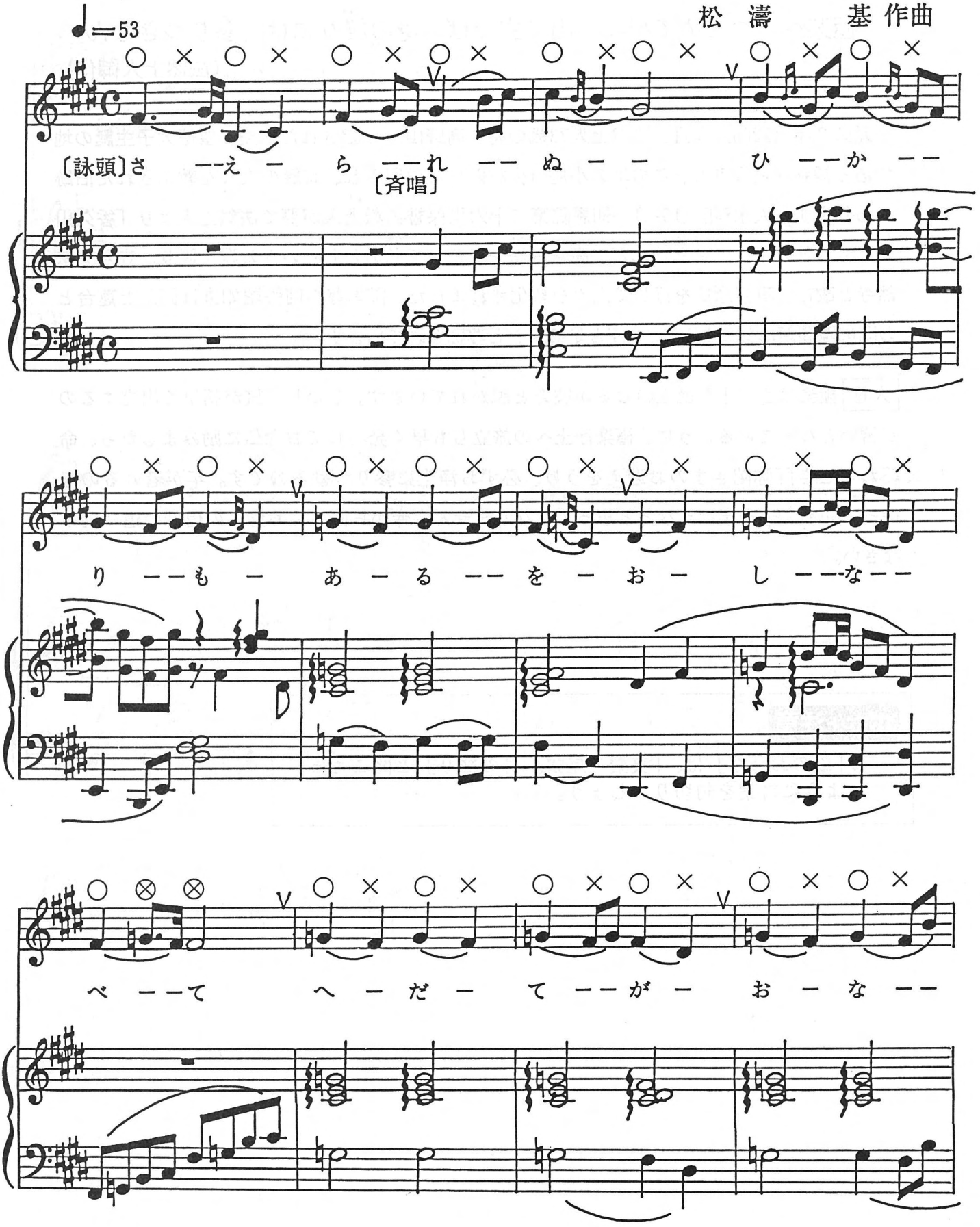
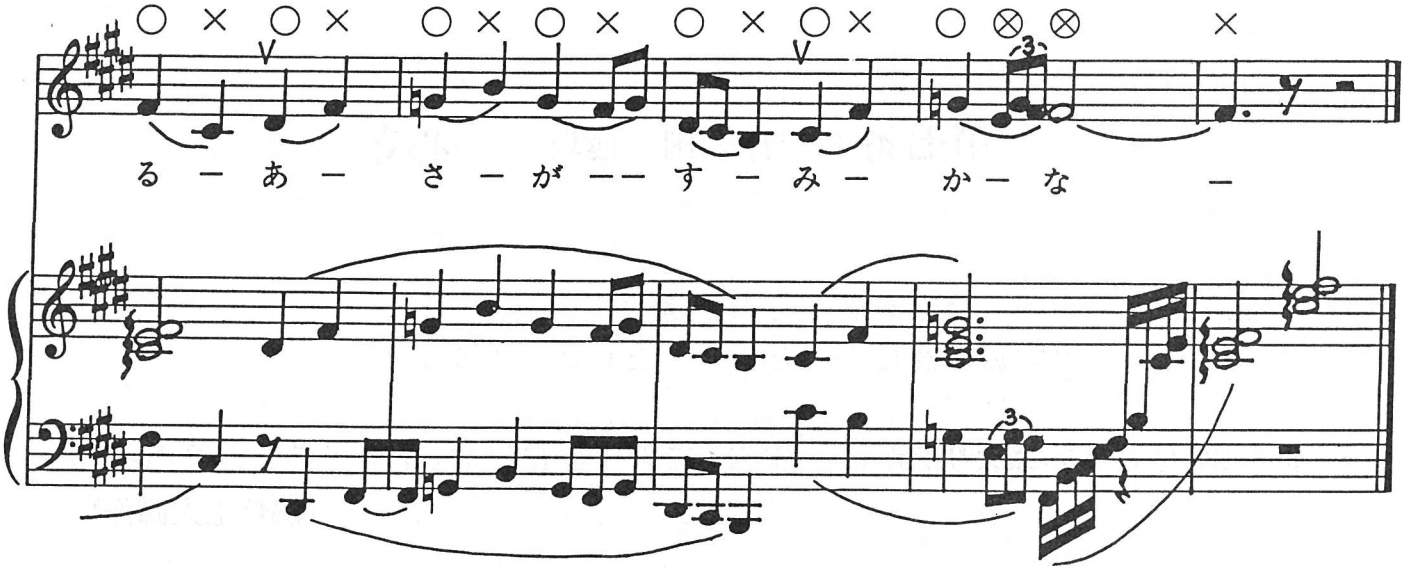
第十一番　東大寺指図堂の御詠歌（円光調）

（春の御詠歌）

松濤　基　作曲



第十一番　大和の国　東大寺指図堂

さへられぬ　光もあるを　おしなべて　隔て顔なる　朝霞かな

（法然上人御作）

治承４年（1180）、平重衡により東大寺や興福寺など南都の町々が焼き打ちに合い、人々の心の動揺は計り知れないものがありました。後白河法皇は、一刻も早く東大寺を再建したいと願われて、翌年東大寺造営の勧進職を法然上人に内命されたのです。しかし、上人は名利を厭い専修念仏の身であるとこれを辞退され、お弟子の俊乗坊重源上人を推挙されました。指図堂は、勧進職となった重源上人が再建工事の指図をなさった普請場の跡で、法然上人も陰の力となって手助けなさったのです。その後建久２年（1191）の頃、この東大寺で多くの学僧を前に浄土三部経を講説されたのであります。指図堂の御影は、墨染の衣に金剛草履をはいて勧進されている法然上人の珍しいお姿であります。

大意　阿弥陀さまのすべての人を隔てなく救い取ろうとされるお慈悲の御光は、さえぎろうとしてもさえぎることができません。しかし、朝霞が春の光を一様に隔てるように、疑い迷う心がお慈悲の光を隔ててしまいます。阿弥陀さまは、たとえ疑い迷う心を持ってもお念仏する人を照らし、救い取ってくださいます。なんとありがたい教えではありませんか。

ポイント注意

●「ひかりもー」「へだてがー」の「ー」の音程、半音低くならないように。